

妊娠出産子育てをめぐる 妻の年齢要因

滝沢 美津子

本調査の対象となった妻の年齢は、妊娠期の調査時で20歳から41歳であり（平均30.2歳）、およそ2世代が含まれるような広い分布となっている。本章では妻の年齢によって妊娠・出産の理由や分娩様式、育児期のサポートに特徴があるかどうかを、妊娠期の調査時の4つの年齢グループ（24歳以下・25～29歳・30～34歳・35歳以上）の比較から見ていく。

■妊娠の方法

今回の妊娠について、「自然にまかせていた」、「計画的に妊娠した」、「子どもができなかったので不妊治療を受けた」、「望んでいなかったが、子どもができてしまった」の4つの選択肢で妻の妊娠期に尋ねたが、全体では、「自然にまかせていた」が47.0%で最も多く、年齢群別では25歳～29歳のグループは53.2%、35歳以上のグループでは29.3%だった。「不妊治療を受けた」は、全体で19.0%、年齢群別では24歳以下のグループは6.9%と最も低く、35歳以上のグループでは41.5%と高かった。「望んでいなかったが、子どもができてしまった」は、全体では4.4%、年齢群別では、24歳以下のグループは13.8%、35歳以上のグループでは2.4%であった。（図1-1）

■出産を決めた理由

妻の妊娠期に、子どもを産もう、と決めた理由の中で年齢グループによる違いが見られた、3項目を見ていく。

1) 年齢的によいタイミングと感じたため

「年齢的によいタイミング」と感じていた人は、24歳以下のグループで41.4%、25歳～29歳のグループで73.0%と最も多く、30～34歳のグループで55.8%、35歳以上のグループでは22.0%と最も少ない。25～29歳および30～34歳の中間層で今回の妊娠・出産を「年齢的によいタイミング」と感じている割合が高い傾向が示された（図1-2）。

2) 年齢的にリミットを感じていたため

妊娠・出産への年齢的限界については、24歳以下のグループには該当者はなく、25～29歳のグループは8.7%、30～34歳のグループは32.7%、35歳以上のグループは80.5%と高い割合を示した。25～29歳のグループでは8.7%と30～34歳のグループでは32.7%であった。かつては、高年齢妊産婦は30歳以上と定義されていたが（現在では35歳以上）、女性の妊娠・出産と年齢との関連では、30歳はある種の節目であるという認識を持つ者も少なからずいることが推測されよう。（図1-3）

図1-1 今回の妊娠について（妊娠期妻・年齢別）

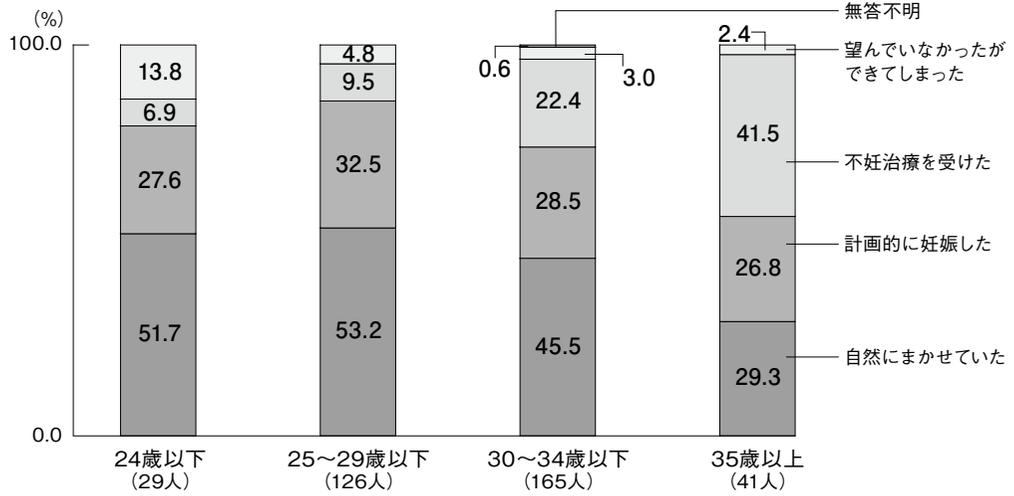


図1-2 今回の妊娠について：年齢的によりタイミングと感じたため（妊娠期妻・年齢別）

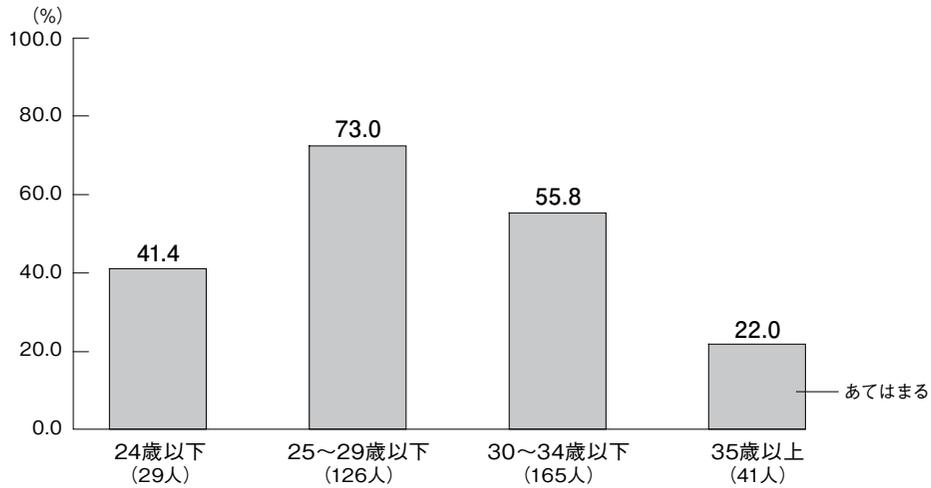
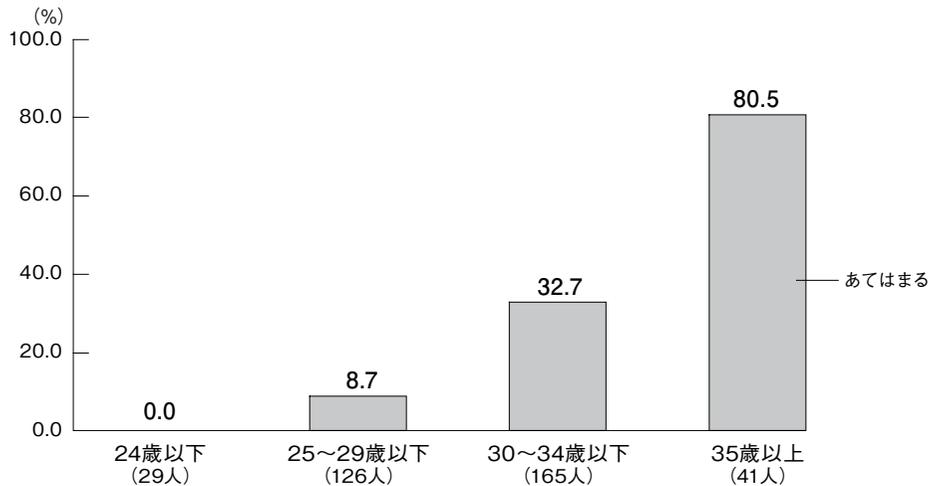


図1-3 今回の妊娠について：年齢的にリミットを感じていたため（妊娠期妻・年齢別）



3) やりたいことはすべてやったため

全体では「非選択」85.9%、「あてはまる」14.1%と少数であったが、「あてはまる」とした人は24歳以下のグループでは該当者なし、25～29歳のグループでは11.1%、30～34歳のグループでは16.4%、35歳以上のグループでは24.4%で最も多かった。(図1-4)

■男の子と女の子、どちらが欲しい

妻の妊娠期に、全体では「どちらでもよい」は61.5%と最も多かったが、「男の子」が欲しいと答えた人は12.1%、「女の子」が欲しいと答えた人は26.4%で「女の子」は「男の子」の2倍以上であった。

年齢群別では「男の子」は、24歳以下のグループで24.1%、25～29歳のグループで9.5%、30～34歳のグループでは12.1%、35歳以上のグループでは9.8%で若い年齢群で高く、高年齢群で低かった。「女の子」は、24歳以下のグループで41.4%、25～29歳のグループでは27.0%、30～34歳のグループでは26.1%、35歳以上のグループでは17.1%であった。「どちらでもよかった」では24歳以下のグループで34.5%、25～29歳のグループで63.5%、30～34歳のグループでは61.8%、35歳以上のグループでは73.2%で、25歳以上で「どちらでもよかった」とする人の割合が急増している。「男の子」よりも「女の子」が欲しいという傾向はどの年齢群でも見られたが、「どちらでもよい」という回答は、35歳以上のグループがいちばん高く、男児と女児のいずれかをほしいとするこだわりには低い傾向を示した。(図1-5)

■分娩の実態と年齢要因の関連

実際の出産をめぐる、在胎週数、分娩所要時間、分娩様式と分娩時の医療的介入、出産した子どもの身体の状態(身長・体重)の4つの視点から年齢要因との関連をみた。

1) 在胎週数

24歳以下のグループでは平均在胎週数は38週、25～29歳のグループでは39週、30～34歳のグループでは39週、35歳以上のグループでは39週で、どの年齢群も平均在胎週数は満期産に達しており、年齢的な影響は見られなかった。

2) 分娩所要時間

24歳以下のグループでは10時間、25～29歳のグループでは12時間、30～34歳のグループでは12時間、35歳以上のグループでは9時間で、分娩にかかった時間に年齢的な影響は見られなかった。

3) 分娩様式と分娩時の医療的介入

分娩様式と分娩時の医療的介入について尋ねた結果、全体の62.4%が自然分娩であった。吸引(かん子)分娩は10.2%、陣痛促進は8.0%、予定帝王切開および緊急帝王切開はともに6.0%であった(無答不明は7.4%)。年齢によって分娩様式に大きな違いは見られず、どの年齢層においても自然分娩の割合が高かった。

図1-4 今回の妊娠について：やりたいことはすべてやったため（妊娠期妻・年齢別）

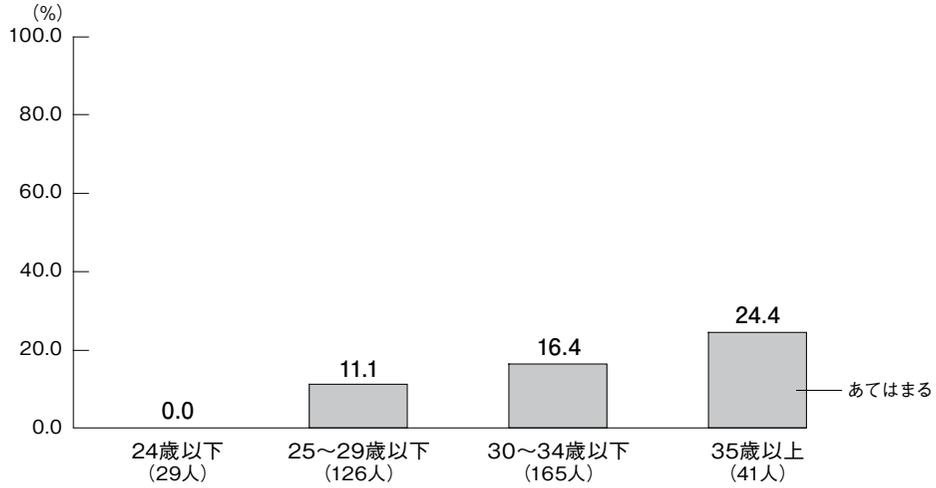
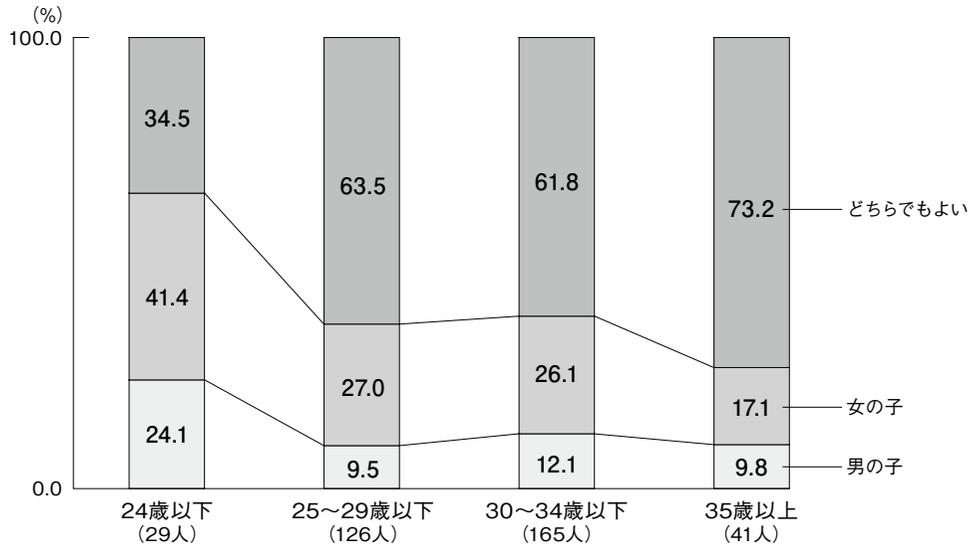


図1-5 今回の妊娠について：男の子と女の子とどちらが欲しいですか（妊娠期妻・年齢別）



4) 子どもの身体の状態 —身長と体重—

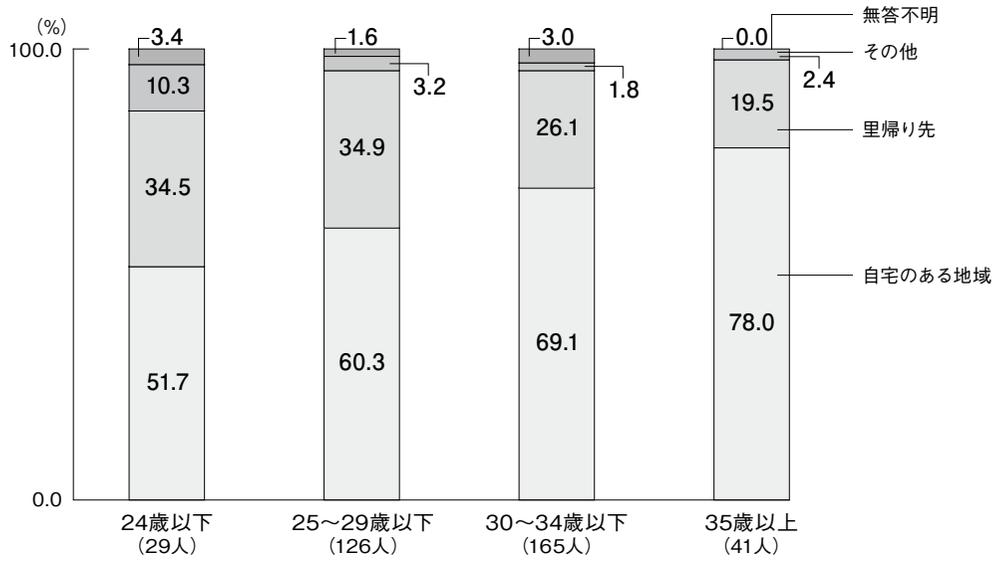
生まれた子どもの身長は、24歳以下のグループで49.4cm、25～29歳のグループでは49.3cm、30～34歳のグループでは49.0cm、35歳以上のグループでは49.6cmで、すべての年齢群で49cm台で、年齢との関連は見られなかった。出生時の体重は、24歳以下のグループでは3035g、25～29歳のグループでは3035g、30～34歳のグループでは2972g、35歳以上のグループでは3089gで、どの年齢群にも2500g未満の低出生体重児や4000g以上の巨大児の出生はなかった。

以上、分娩の実態と年齢要因との関連をみてきたが、在胎週数、分娩所要時間、分娩様式、分娩時の医療的介入、出生時の子どもの身体的状態のいずれにも年齢要因との明らかな関連はみられなかった。

■出産をした地域（場所）

出産場所は、「自宅のある地域」、「里帰り先」、「その他」で、「自宅のある地域」は全体では65.9%、「里帰り先」は28.8%、「その他」は3.0%であった。年齢別群では「自宅のある地域」が24歳以下のグループでは53.6%、25～29歳のグループでは61.3%、30～34歳のグループでは71.3%、35歳以上のグループでは78.0%で、高年齢群になるにしたがって多くなっていた。「里帰り先」では24歳以下のグループでは34.5%、25～29歳のグループでは34.9%、30～34歳のグループでは26.1%、35歳以上のグループでは19.5%で高年齢群がいちばん少なく、35歳以上のグループでは里帰り出産をする人は少ない傾向にあった。この傾向は次で触れる育児の人的サポート環境で、育児について相談したり、頼りにできたりする両親の存在との関連と同様な傾向であり、出産場所として両親のいる実家が選ばれる割合は、加齢とともに減少していく傾向がうかがわれた。(図1-6)

図1-6 出産地域(0歳児期妻・妊娠期の年齢別)



■育児の人的サポート環境—相談をする人

子育てをする環境で、特に人的サポートを考えると、実父母、義父母など親族の存在は大きいものと考えられる。この二者から年齢的な影響の傾向を見た。

1) 自分の親（実父母）

全体では「相談したことはない」5.2%、「1～2回はしたことがある」7.4%、「時々している」44.5%、「いつもしている」42.9%で、「時々している」が最も多かった。「いつもしている」を年齢群別で見ると、24歳以下のグループでは62.1%、25～29歳のグループでは54.8%、30～34歳のグループでは34.5%、35歳以上のグループでは26.8%で、24歳以下のグループが最も多かった。(図1-7)

2) 配偶者の親（義父母）

全体では、「相談したことはない」22.0%、「1～2回はしたことがある」26.1%、「時々している」42.6%、「いつもしている」8.8%で、「時々している」が最も多かった。

「いつもしている」を年齢群別で見ると、24歳以下のグループでは13.8%、25～29歳のグループでは11.1%、30～34歳のグループでは6.7%、35歳以上のグループでは7.3%で、24歳以下のグループが最も多かった。「相談したことはない」では、24歳以下のグループでは17.2%、25～29歳のグループでは19.0%、30～34歳のグループでは23.6%、35歳以上のグループでは26.8%で、35歳以上のグループが最も多かった。子育ての相談は義父母よりも実父母のほうが相談頻度がより高い傾向があることがうかがわれた。(図1-8)

図1-7 子育ての相談先：実家の親（0歳児期妻・妊娠期の年齢別）

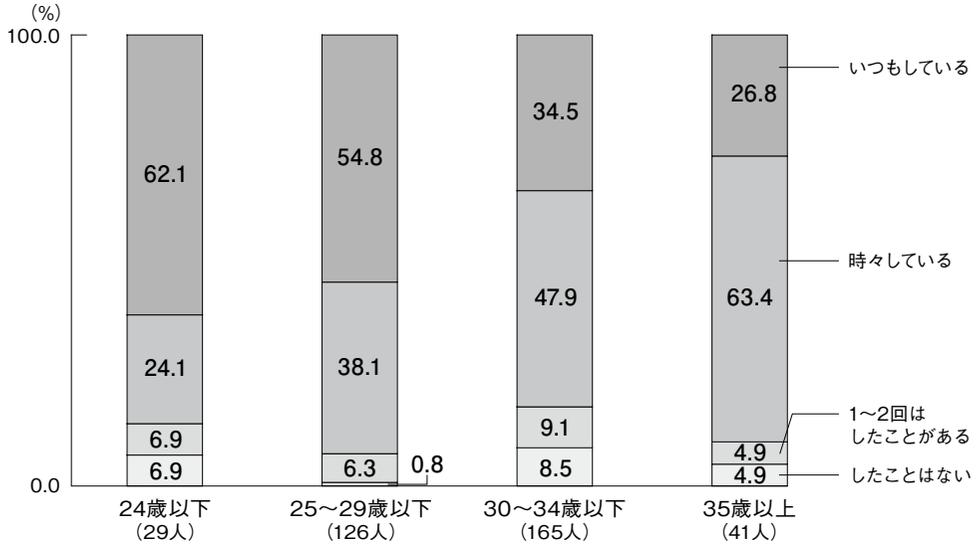
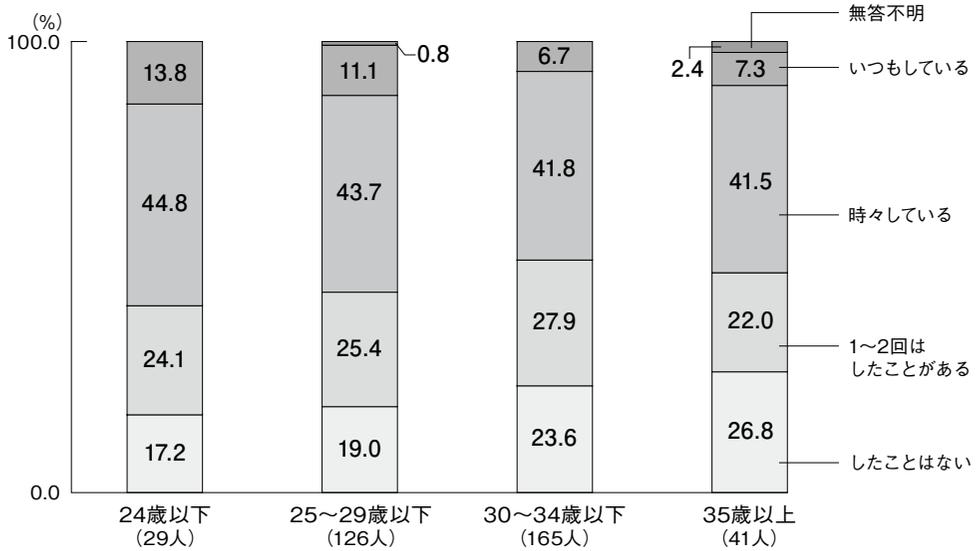


図1-8 子育ての相談先：配偶者の親（0歳児期妻・妊娠期の年齢別）



■育児の人的サポート環境一頼りになる人

次に、子育ての人的サポートで、実父母はどれくらい頼りになる存在なのかを見た。

1) 私の父親（実父）

全体では、「とても頼りになる」17.3%、「やや頼りになる」28.3%、「どちらともいえない」16.5%、「あまり頼りにならない」17.0%、「まったく頼りにならない」9.1%で「やや頼りになる」が最も多かった。

年齢群別では、「とても頼りになる」が、24歳以下のグループでは31.0%、25～29歳のグループでは15.1%、30～34歳のグループでは15.8%、35歳以上のグループでは19.5%で、24歳以下のグループで最も高かった。（図1-9）

2) 私の母親（実母）

全体では「とても頼りになる」54.7%、「やや頼りになる」25.0%、「どちらともいえない」7.4%、「あまり頼りにならない」6.3%、「まったく頼りにならない」2.5%で、「とても頼りになる」が最も多かった。年齢群別では、「とても頼りになる」が、24歳以下のグループでは69.0%、25～29歳のグループでは61.1%、30～34歳のグループでは50.3%、35歳以上のグループでは43.9%で、24歳以下のグループで最も高く、35歳以上のグループで最も低かった。前項の実父と同様なパターンを示したが、どの年齢群でも「とても頼りになる」の回答者は実父よりも多かった。全体として、子育ての人的サポート環境で実母の存在は大きいですが、年齢が高くなるほど実母を子育ての面で頼りにできなくなっていく傾向がうかがわれた。（図1-10）

図1-9 祖父母の子育てサポート：実家の父親（0歳児期妻・妊娠期の年齢別）

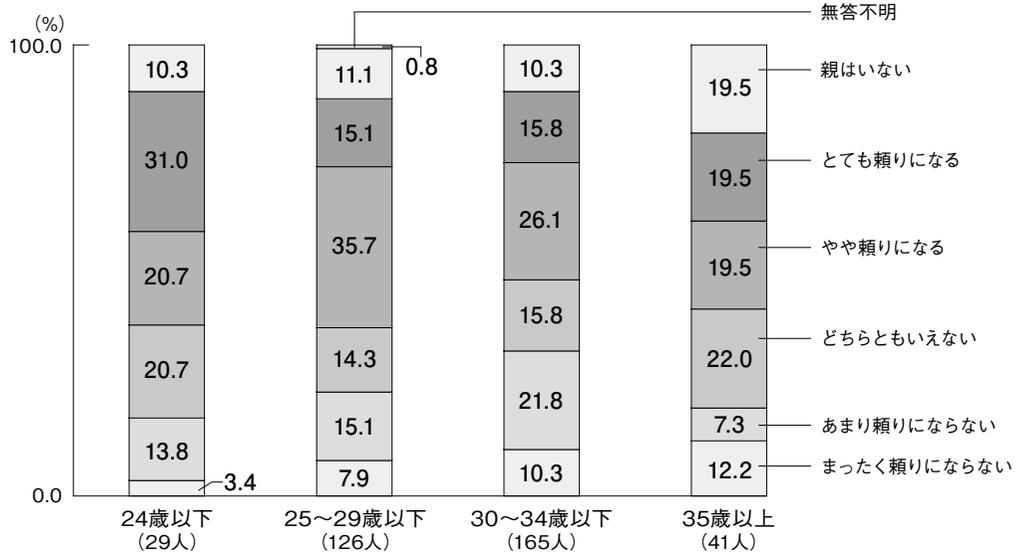


図1-10 祖父母の子育てサポート：実家の母親（0歳児妻・妊娠期の年齢別）

